

## 千葉公園 みどりの楽講/第9回

# 華道家が教えるアートな松飾り

千葉公園みどりの楽講第9回が12月21日に開催されました。講師は龍生派の華道家・山内花秋さん。千葉公園・好日亭の広間に受講者の女性20人が集まり、松飾り作りを体験しました。

素材は、若松(※)と紅白の水引。真っ直ぐ伸びた松に水引を輪にして結び付けるだけのシンプルな飾りです。一見、簡単なようで実際にやってみると、水引の形や取付け位置などちょっとした違いで良くも悪くもなり、アートな松飾りを目指して皆さん真剣に取り組んでいました。

完成した松飾りを手にして記念撮影の後、身近な小物を使った正月の生け花の紹介や、門松や正月飾りの由来の話をしました。そして、本講座のもう一つのお楽しみ特製弁当。今回はクリスマスと新年に向けて「行く年来る年」をイメージしたお弁当を皆で美味しくいただきました。





正月に門松や松飾りを飾るのは「田の神様である歳神様を迎え入れるため」といわれます。元々、正月飾りとしてはサカキ（榊）やシキミ（柘）などの常緑樹が使われていましたが、平安時代後期になると中国でめでたいとされるマツ（松）が使われるようになりました。また、竹を使った門松が飾られるようになったのは戦国時代以降といわれています。

花き業界ではマツを「若松（わかまつ）、根引き松、苔松（こけまつ）」と年齢別に分けています。正月飾りに使うのは切枝の若松です。真っ直ぐ伸びた幹に上向きの短い枝が数本付いているのが特徴。生長が良い畑に黒松の種をまいて密植し、3～4年置いて徒長させるとこのような形になります。茨城県神栖市波崎地区では昭和の初めから若松の生産が始まり、現在では全国出荷の6割を占め日本一となっています。